

ベケットのノイズと第三の言語

今関裕太（江戸川大学）

「三つの対話」をはじめとするテキストにおいてベケットが表明した、‘The expression that there is nothing to express’という表現の様態——あるいは、言葉を通して沈黙を表現するというアポリアの解決——は¹、彼がその後長い時間をかけて追究していくことになる芸術的理想を要約した言明として頻繁に参照されてきた。本発表の目的は、ベケットがこうした理想を追求するうえでどのような技法を彫琢しどのような表現形式を採用したのかを、彼の作品群と音響メディアの関係に照らして再検討することにある。これまで多くの研究者たちが、『名づけえぬもの』や『事の次第』にこの追究の完遂を認めてきた一方で、散文作品ではなく映像作品にその完成を見てとる批評家もいた。例えばオルガ・ベルナルが、『事の次第』で描かれる、聴覚的には不明瞭でありながらも分節化や理解の可能性を示唆する言語に上記のアポリアの解決を見出した一方²、ジル・ドゥルーズは、『クワッド』や『幽霊トリオ』における脱言語的な表現にその解決を認めている³。本発表ではこれら二つの見方を批判的に検討したうえで、言葉を通して沈黙を表現するという逆説的な理想の完遂を『事の次第』以降の小説に認める立場を取る。ただし、そのためには、ラジオをはじめとする音響メディアに伴うノイズを散文に取り入れる方法の案出が不可欠であったと主張する。この主張を検証するために、まず『燃えかす』において、ベケットが音声に伴うノイズの重要性に気づきながらも、その活用方法を見出していなかったことを確認する。そのうえで、『事の次第』や「びーん」において、聴覚的には不明瞭でありながらも潜在的な分節性を示唆する言語が描かれるに至った重要な背景として、1950年代末から1960年代初頭にかけてBBCのラジオで放送された自身の散文作品をベケットがフランスで耳にし、自らの言葉が電波の中で歪められ寸断される状況を経験したことに着目する。以上を通して示されるのは、ベケットが自身の言葉から既知の意味作用を奪うと同時に

¹ S. Beckett, *Disjecta: Miscellaneous Writings and a Dramatic Fragment*, ed. Ruby Cohn (New York: Grove Press, 1984), 139, 51–54.

² O. Bernal, *Langage et fiction dans le roman de Beckett* (Paris: Gallimard, 1969).

³ G. Deleuze, ‘L’Épuisé’, in *Quad et autres pièces pour télévision* by Samuel Beckett (Paris: Minuit, 1992), 55–106.

潜在的な分節性と未知の意味を与え、新たな言語を創り出す過程で、音響メディアに伴うノイズが決定的な役割を果たしたことである。

なぐさめえぬもの ― 『わたしじゃないし』における同情と身体の問題

清水さやか（日本学術振興会特別研究員 PD）

ベケットの戯曲『わたしじゃないし』（1972年）で語られるある女性の痛ましい物語は、同情することを容易に許さない。「口」が語る「彼女」の人生は、（断片的にしか開示されないとはいえ）もし通常で語られれば聴く者の哀れみを誘うだろうが、舞台上では聴き取れないほど高速で語られるため、観客は「彼女」の物語にほとんど感情移入することができない。また、俳優の顔全体を見せる代わりに口だけに照明を当て、口という身体器官が自立的に喋っているように見せる手法は、観客がこの作品の語り手を同情可能なひとつの人格とみなすことの大きな妨げとなる。

同情の不成立という問題は、「聴き手」の身振りにも見てとれる。この作品を通して「聴き手」に指示される動作は両腕を身体側から横へ向けて四回上げ下げすることのみだが、それは「無力な同情／哀れみ（helpless compassion / pitié impuissante）」の身振りであると明記されている。「口」は神に言及する際に「慈悲深い（merciful / miséricordieux）」という形容詞を繰り返すが、皮肉の哄笑とともに吐き出されるその言葉は、神の無慈悲さを強調するとともに、「彼女」が死してもなお神の愛を受けられず、慰めを得られないままであることを示唆する。

もとよりベケット作品では、同情や哀れみという感情が重要な意義を持つと考えられる。苦しみの渦中にあるベケット作品の登場人物ないし語り手は、慰められることを望むかのようにしばしばもう一人の自己からの同情や哀れみを欲する。発表者は博士論文（2021年提出）において、ベケット作品における同情（compassion）について考察を試みたが、小説三部作のテキスト分析に主眼があったこの論文では、戯曲やその他のメディア作品において同情という問題がどのように展開されたのかという点を十分に扱うことができなかった。したがって今回は、ベケットにおける同情（あるい

は同情の失敗) という問題が、戯曲・映像作品でどのような展開を見せるのかという点に着目しながら、『わたしじゃないし』という特異な作品における同情の問題について考えたい。

今回の発表で同情という問題を扱うにあたり、切り口としたいのが身体の問題である。『わたしじゃないし』は、他のベケットの戯曲と比較した場合、とりわけ身体の扱い方に大きな特徴がある。顔の不在、暗闇に浮かび上がる独立した口、「聴き手」の不明瞭な身体、「聴き手」の身振り、「彼女」の失われた身体——このような身体性は、同情の不成立と具体的にどのように関わるのだろうか。同情によって慰められることをどこかで願いながらもそれを激しく拒絶するという「口」の両義的な態度に注目しつつ、この作品にあらわれる同情を阻むような身体イメージを分析することで、「なぐさめえぬもの」の姿に迫りたい。